令和7年度　豊崎中学校のあゆみ
―結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について―

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様に説明責任を果たすことが重要であると考え、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、学校が各調査の結果や各調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、各調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにし、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部分であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

1　「全国学力・学習状況調査」の調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への学習指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2　「中学生チャレンジテスト」の調査の目的

⑴ 大阪府教育委員会が、府内における生徒の学力を把握・分析することにより、大阪の生徒課題の改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図る。
加えて、調査結果を活用し、大阪府公立高等学校入学者選抜における評定の公平性の担保に資する資料を作成し、市町村教育委員会及び学校に提供する。

⑵ 市町村教育委員会や学校が、府内全体の状況との関係において、生徒の課題改善に向けた教育施策及び教育の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、そのような取組を通じて、学力向上のためのPDCAサイクルを確立する。

⑶ 学校が、生徒の学力を把握し、生徒への教育指導の改善を図る。

⑷ 生徒一人ひとりが、自らの学習到達状況を正しく理解することにより、自らの学力に目標を持ち、また、その向上への意欲を高める。

1　全国学力・学習状況調査

※中学校理科はICT端末等を用いた、文部科学省CBTシステム（MEXCBT）によるオンライン方式（以下、「CBT」【＝Computer Based Testing】とする）で実施。

学年 実施月日		生徒数（人）	平均正答率（%）		平均無解答率（%）	
			国語	数学	国語	数学
3　年	学校	56	61	55	4.9	7.1
	大阪市	—	52	46	6.8	11.2
4月15，17日	全国	—	54.3	48.3	6.7	10.6

	平均IRTスコア
	理科
学校	519
大阪市	489
全国	503

※IRTとは、国際的な学力調査等で採用されているテスト理論です。
この理論を使うと、異なる問題から構成される試験・調査の結果を、同じものさし（尺度）で比較することができます。
※IRTスコアとはIRTに基づいて各設問の正誤パターンの状況から学力を推定し、500を基準にした得点で表すものです。

2　中学生チャレンジテスト

学年 実施月日		生徒数（人）	平均点（点）					平均無解答率（%）				
			国語	社会	数学	理科※	英語	国語	社会	数学	理科※	英語
3　年	学校	74	74.5	53.3	57.2	50.4	62.9	4.0	5.8	11.1	8.8	3.5
	大阪市	—	64.8	51.5	54.3	46.5	54.4	6.1	5.8	11.1	9.4	6.5
9月2日	大阪府	—	64.2	51.2	53.9	46.0	53.2	6.8	6.5	12.1	11.0	7.4

※　3年生の理科はB問題を選択

令和7年度　豊崎中学校のあゆみ
―結果概要とその分析から見えてきた成果・課題と今後の取組について―

調査結果から

【成果と課題】
○ 全国学力・学習状況調査
《国語》
「自分の考えが伝わる文章になるように、根拠を明確にして書くことができるかどうかをみる」問題、「資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる」問題が、全国平均をわずかに下回ったが、その他の問題では全国平均を上回った。平均正答率が全国平均10ポイント以上の項目は4つあり、特に「読み手の立場に立って、語句の用法、叙述の仕方などを確かめて、文章を整えることができるかどうかをみる」問題の正答率は、全国平均＋17．1ポイントと大きく上回った。

《数学》
「素数の意味を理解しているかどうかをみる」の問題、「必ず起こる事柄の確率について理解しているかどうかをみる」の問題、がそれぞれわずかに全国平均に届かなかったが、その他の項目は全国平均を上回った。特に「多角形の外角の意味を理解しているかどうかをみる」問題の正答率（全国平均＋19．7ポイント）をはじめ、正答率が全国平均を10ポイント以上上回った項目が4つあった。

《理科》
「化学変化に関する知識及び技能を活用して、実験の結果を分析して解釈し、化学変化を原子や分子のモデルで表すことができるかどうかをみる」問題については、正答率が全国平均－10.6ポイントと大きく開きがある。その他3項目で正答率が全国平均マイナスだった。一方、「地域の言い伝えを科学的に探究する学習場面において、大地の変化と、地層の様子やその構成物に関する知識及び技能を関連付けて、地層の重なり方や広がり方を推定できるかどうかをみる」問題の正答率が全国平均＋16．7ポイントと大きく上回ったほか、その他18項目で正答率が全国平均を上回った。

○ 中学生チャレンジテスト（3年生）
　全教科において、平均点が大阪府及び大阪市よりもよい結果を得ることができた。無回答率も、ほぼ大阪府、大阪市より下回るか、同程度であった。
　とくに、国語、英語において、大阪府及び大阪市よりも大きく上回ることができたことについては、生徒の努力がまず一番である。そのうえで、生徒の努力を支える教員についても、毎月の研修により教材研究の充実や授業力を向上させてきた。これにより、生徒により深く内容を理解させることで基礎学力を定着させることができたことも大きいと考えられる。

【今後に向けて】
○　全国学力・学習状況調査
　授業規律を確保しつつ、生徒の学力向上に向けた取り組みとして、各教科ともに基礎・基本的な学力の定着についての取り組みを授業を中心に継続して行う。加えてアウトプットを意識させて学習させることで、さらなる学力の向上や思考判断力を養う。

○　中学生チャレンジテスト（3年生）
　次年次以降もよい結果を収めることができるよう、継続して教員の指導力向上に努めるとともに、生徒に対しては、自主学習の確立を中心に基礎学力の定着及びあきらめずに取り組む姿勢を身につけさせる。